

02・小動物系ツンデレ堅物JKのリアルひとりえっち生実演

本編トラック01からそのまま続き。

三月三十日（土）十二時過ぎ。

結月の治療用に用意された仮想空間の内部。

ルナによる『接続』が行われてから数分後。

主人公は、見知らぬ大きな部屋で目を覚ました。

SE1 部屋の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【0—5秒ほど流してSE2】

SE2 主人公が起き上がる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……？」

主人公、ひとまず大きく伸びをすると、それからきよろきよろと周囲を見回し、自分が仮想空間に送られた事を把握して、思わずホッと胸をなでおろした。

まず、第一段階は成功である。自分の意識は、問題なく転送されたようだ。しかし、与えられた時間は多くはない。

主人公はすぐさま立ち上がると、まずは結月を発見するべく、この空間——なんだか、高級なマンションや、ホテルの一室のような雰囲気のある場所だ——を歩き始める。

とはいっても、主人公は高級なマンションやホテルに住んだり泊まったりした事はないし、それは結月も同様のはずだ。

つまりこれは、結月がドラマや映画。あとは分譲マンションのチラシの写真などを見て作り出した『住んでみたい憧れの場所』という事だろう。

この空間においては、結月のイメージは絶対という事を、主人公は実感を伴って理解した。

SE 3

主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【10秒ほど流したあたりで、次の『結月』のセリフがかすかに聞こえ始める】

〈主人公〉

「ゆづ？　いる？」

主人公、結月の名前を呼びながら、ひとまず部屋の構造を理解するべく歩き回る。そうするうち、奥の部屋の方から、かすかに人の声が聞こえてくる事に気づく。

〈主人公〉

「……………」

それが誰のものなのかは、まだ、遠すぎてわからない。

だが、状況から察するに、結月の声と考えるのが自然だろう。

……となると、彼女は誰かと話しているのだろうか？

自分以外にもこの空間に送られたものがある？

ルナは何も言っていなかったが、そのような事はあり得るのだろうか。

ひとまず、警戒はしておくに越した事はない。

★ボイス加工あり

・非常に遠く、かすかに聞こえる程度の距離にする

・扉越しに聞こえているような、こもった声

●正面 30センチ

■主人公の存在に気づかないまま、ベッドにうつぶせになり、シーツに向かってうずくまるような格好で、夢中でクリトリスオナニーしている。

結月はいつもこの体勢でオナニーしている。

この体勢は自分の身体を固定しやすく、つまり気持ちいい所を触りやすい。

また、声もこもりやすいので、実家暮らしの学生である結月にとっては、非常に合理的なポーズなのである。

しかし、この体勢には一つ難があった。

結月は集中すると、周囲の様子に極端に鈍くなる。

その性質と『シーツを見つめた状態であるオナニー』はあまりにも相性が悪い。つまり、誰かが近づいて来ても、まるで気づけなくなるのだ。

まさに、今である

「【※息遣いのみ※】で表現する。

押し殺すような、漏れ出るような、甘くて小さい呼吸」

んっふ……。

【※6回※ 呼吸する。

ゆっくりとした、少し荒い、甘くて小さい呼吸】

はあ。はあ……。はあ。

はあ。はあ。はあ……。っ ♡
」

SE 4 主人公の足音2

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……？」

主人公、声の方向にあったドアの前まで行くと、聞き耳を立てるべく、一度立ち止まる。
しかし、どうしても首をかしげてしまう。

声の主は結月で間違いなさそうだ。

だが……どうも様子が妙である。

★ボイス加工あり

・5メートル程度離れた距離 先ほどよりは声が聞こえる
・扉越しに聞こえているような、こもった声

● 正面 30センチ

■ 絶頂が近づいている

「【押し殺すような、漏れ出るような、甘くて小さい喘ぎ。

結月は声を出さないようにするオナニーに慣れており、今もそうしている感じで】

……っあ♡

あ♡ あ♡ あ♡

【ここから濁音喘ぎが混じり始める。

ゆっくりと、小さく、びくつと喘ぐ。

『声を響かせない事』に慣れた感じの、濁りつつもかわいい喘ぎ】

“あ……。

“あっ……♡

“あ♡ “あ♡ “あ♡

〈主人公〉

「……………」

——ああ、なるほど、そういう事か。

主人公、数舜ほど呆然としたのち、聞き耳を立てていた側の頭を、思わず、こん、と扉にぶつけた。

それから、何ともいえない複雑な思いで、大きく息をつく。

声の様子から、この奥で何が起きているか、概ね察したからである。

……正直、気まづくないと言えは嘘になる。

だが、いまさらそんな事も言っていられない。

自分は結月を助けるためにここへ来たのだ。こんなところでためらっている場合ではない。

そんな気持ちで、一見しれつと……だが実際にはとても緊張と不安を感じながら、主人公は扉を開けた。

SE 5 主人公が扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

【小さな音量で流す】

SE 6 結月が布団の中でもどもどする音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【小さめの音量で流す】

【SE 5、7と途中から重ねて流す】

【扉が開くとともに、フェードインするように聞こえ始める】

【▲ 3 でフェードアウトする】

SE 7 結月が自分の股間を愛撫する水音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【小さめの音量で流す】

【SE 5、6と途中から重ねて流す】

【扉が開くとともに、フェードインするように聞こえ始める】

【▲ 1 で一段階音量と速度がアップする】

【▲ 2 で、さらに一段階音量と速度がアップする】

【▲ 3 でフェードアウトする】

それでも、結月はまるで気づいていない。

絶頂が近づいているのか、意識が完全にそちらへ行ってしまったているようだ。

★ボイス加工あり

・1メートル程度離れた距離　もう、問題なく聞こえる

●正面　30センチ　下　50センチ

■さらに絶頂が近づいている。

主人公がもうかなり近くにいるのに、全く気付かず夢中で続けている。

普段の結月なら、さすがに気付く距離である。

それなのに、今日の結月は集中しすぎている。

結月自身『何かがおかしい。普段の自分ではない気がする』と思いながら、行為を続けている

「※息遣いのみ※　で表現する。

押し殺すような、漏れ出るような、甘くて小さい呼吸」

んっ……！

はああ……… はああ……… はああ………

「低く、ゆっくりと。

独り言を言いながら、うっとり喘ぐ。

自分で快感をコントロールできている感じ」

ああ……♡ いい……♡ いい……♡ つ♡
気持ちいいよう……♡

【高く、小さく、かわいくびくつと喘ぐ。
物凄く気持ちよさそうに】

……あ♡ あ♡ あ……っ♡

【※17回※ 甘く、早く、気持ちよさそうに呼吸する。
だんだん早く、荒くなっていく】

はーっ♡ はーっ♡ はーっ♡

はーすう、はーすう、はーすう。

はーふう、はーふう、はーふう、はーふう♡

【息を吐いた後、びくつと小さく、低く喘ぐ】
ふーっ……♡ う♡

【低く、物凄く気持ちよさそうに喘ぐ。

一行ごとに少し間があく感じで。

だんだん、快感をコントロールできなくなっていく】
っ♡あ。

ぎもちい……♡あ♡

♡あ♡♡あ♡

あ
あ
……
♡
└

★ボイス加工あり

●正面 30センチ 下 50センチ

主人公の事を想いながら声を漏らす。

好き。
好き好き好き好き好き
好き
♡

【絶頂が近づき、低く、耐えかねて声が漏れる感じで。

一行ごとに少し間があく感じで。

物淒く氣持ちよさそうに】

く
う
う
…
…
♡

つぐ♡

//
あ
♡

“あ”あ”あ”あ”あ……♡”

▲2 ここで、SE7の音量と速度がさらにもう一段階アップする

★ボイス加工あり

・1メートル程度離れた距離 もう、問題なく聞こえる

●正面 30センチ 下 50センチ

「【※12回※】かなり早く、気持ちよさそうに呼吸する。

だんだん苦しそうに、さらに荒くなる」

はーふう、はーふう、はーふう、はーふう♡

ふーっ♡ ふーっ♡ ふーっ♡ ふーっ……♡

■絶頂がさらに近づく絶頂する。

結月自身『普段ならもつと耐えられるはずなのに、おかしい』『気持ちよすぎる』と思うほど、突然、あっさり絶頂する

【絶頂が近づき、赤文字部分で絶頂する。

一行ごとに少し間があく感じで。

低く、耐えかねて声が漏れる感じで。

物凄く気持ちよさそうに】

うう ♪ ♪

うう ♪ ♪

うう ♪ ♪

うううう ♪ うっ……！ ♪

▲ 3 ここで、SE 6と7がフェードアウトする

★ボイス加工あり

・1メートル程度離れた距離 もう、問題なく聞こえる

●正面 30センチ 下 50センチ

「※10回※ 早く、物凄く荒く、気持ちよさそうに呼吸する。

だんだんゆっくりと、落ち着いていく」

はーっ、はーっ、はーっ、はーっ、はーっ…… ♪

はああ……。はああ……。

ふーっ。ふーっ。ふーっ…… ♪

【少し間をあけてから。

一息ついた感じで、ぼそっと独り言を言う。

うっとうと小さく】

気持ちよかった……。

【※6回※ 荒く、気持ちよさそうに呼吸する。

だんだんゆっくりと、落ち着いていく】

はー、はー。はー、はー。

はー……♡ はー……♡ つ♡」

〈主人公〉

「……………」

SE8 結月がベッドの上で転がる音

【最初から最後まで流す】

こうして結月は絶頂し、布団をかぶってうつぶせになっていた彼女は、すっかり疲れてしまったのだろう。くたっと、仰向けに寝転がりなおした。

主人公はそれを、いつ声をかけたものか……と見下ろしていたが……。
ここで結月が、ようやく主人公の存在に気づいた。

★ボイス加工あり

・1メートル程度離れた距離　もう、問題なく聞こえる

●正面　30センチ　下　50センチ

■仰向けに寝転んだところ、視界に何かが入り、気になってそちらに目をやる。

絶頂したてでかなりぼーっとしており、まだ状況を理解できていない

「【荒い呼吸で、ぼんやりと不思議そうに。

状況を理解できていない】

……ん……？」

主人公、結月と目が合ったのもつかの間、気まずそうに目を泳がせる。
それから、ついつい引きつり笑いを浮かべてしまう。
覚悟はしていた。だが、やはり少々辛いものがある。

SE9　結月がベッドの上で動く音

【最初から最後まで流す】

★ボイス加工あり

・1メートル程度離れた距離　もう、問題なく聞こえる

●正面　30センチ　下　50センチ

■ きよとんとして。目では状況を理解するが、頭の処理が追い付いていない

「【まだよくわかっていない。】

驚いているのではなく、きよとんと、不思議そうに】

え……。え？」

〈主人公〉

「……どうも。私。みめい」

SE10 主人公の足音3

【最初から最後まで流す】

【結月の正面30センチの距離まで近づいていく】

主人公、意を決して、できるだけ何事もなかったかのような態度で結月に声をかけると、ベッドサイドまで近づいていく。

だがこの結月、なんと裸であった。

先ほどまでは、掛布団をかぶっていたのでわからなかった。

だが、相当暑かったのだろう。仰向けになった際に布団をめくりあげたせいで、今は全部見えてしまっている。

これにはさすがの主人公も頭を抱える。
…退室したくなってきた。

SE11 結月が起き上がる音

【最初から最後まで流す】

●正面 30センチ 下 50センチ

■ベッドサイドに立つ主人公と会話を始める。

『なぜかはわからないが、主人公が来た』という事までは把握するが、まだ頭の処理が追いついていない

「ぼーっとした、間の抜けた声で。

きよとんと、寝起きで声をかけられている感じで」

…あれっ？

何（なん）。何（なん）でえ……？ ♡

何（なん）で、いるのおっ……？ ♡

〈主人公〉

「あー……。えっとね。ゆづ。私、」

主人公、大きく息を吸うと、混乱する結月に、ここまでの経緯を語ろうとする。
しかし、ここで結月がとうとう我に返った。

● 正面 30センチ 下 50センチ

■ ここでようやく我に返る。

本人としては、物凄く驚き、慌てふためいている。
しかし、驚きすぎているのと、声が小さいのとで、そこまで極端に驚いているようには聞こえない

「【ここ】でようやく我に返る】

……あつ。

【途端に慌てだす。

しかし頭がまるで回らず、うまく話す事もできない。

小さく、必死であわあわしている感じ】

あっあつ。

何（なん）でっ……？ ……何（なん）で？

い。いつからっ……？？♥」

〈主人公〉

「……今？」

● 正面 30センチ 下 50センチ

「高く裏返った声で。

驚きすぎて、すっとんきょうな声をあげる」

今あ……？」

〈主人公〉

「うん。今。

約束してたじゃん。今日。だから来たよ。

遅れてごめん」

そうだ。結月に会えたのなら、自分がまずすべきは謝罪である。

主人公、ベッド脇にしゃがみこんで目線を合わせると、深く頭を下げて遅刻を詫びる。

結月は目の前の光景を、きよとんと見つめている。

● 正面 30センチ

■ 思考がフリーズする。話したい事をうまく話せない
「主人公の言葉も『約束』が何かも理解できている。

だが、言葉が追い付かない感じで。

小さく、必死であわあわしている感じ」

あ……。

約、束……？

■ ここで頭が追い付いてくる

「小さな声で。ようやく理解した感じで」

……あ……。

■ とてもホツとして、涙が出てくる。

結月は先程まで『主人公はどうして来てくれなかったのだろう』ととても悲しく、また『約束を破るような人ではない。もしかすると、何かあったのだろうか』と心配していたので。また、そう主人公を信じたい一方で『主人公は約束をすっぱかしたに違いない。こちらは勇気を出して誘ったのに、何てひどいやつなのだ』と考え、主人公を責めたい気持ちもあったので。

これらのむしゃくしゃした気持ちを無理やりにでもかき消したくて、オナニーしていたので

「とてもホツとした様子で。

安堵の息が漏れ出る感じで」

ああ……。

……そっか……。

忘れた訳じゃ、なかったんだ……♡

そっか。

よかった……。

【鼻をすすりつつも、嬉しそうに。

泣いているというよりは『泣きそうになっている』という感じで』
ぐすつ。

来てくれて、ありがとう……」

〈主人公〉

「……うん」

主人公、今にも泣き出しそうな結月の髪を、ぼんぼんと優しく撫でてやる。

主人公にとって、この度の治療における最大の懸念点は『結月は、自分の事を怒っているのではないか』という事だった。

主人公は数時間前、三か月ぶりの結月との約束に大遅刻し、ようやく駆け付けた頃には、

結月はもう意識を失っていた。

ゆえに彼女は、主人公が『来た』事すら知らない。

『すっぱかされた』と怒っていても自然だからだ。

● 正面 30センチ

■ 安堵のあまり、自分の置かれている状況を一度忘れる

「【鼻をすすりつつも、嬉しそうに。

泣いているというよりは『泣きそうになっている』という感じで」

……へへ。嬉しい」

なので、主人公にとってこの反応は意外であった。

対面した結月は怒り狂い、まずは言葉で主人公を責め立てる。

それから、枕やクッションの一つや二つは投げてる……そのくらいの反応は覚悟していたからだ。

本来であれば、もう少しこの件について話を続け、倒れた経緯などを聞きたいところだが、今はそうもいかない。

早急に話を進める必要がある。

〈主人公〉

「ところで」

● 正面 30センチ

■ 主人公が話題を切り替えた事で、再び我に戻る

「『あ。自分が裸である事、すっかり忘れてた』という感じで」
……あ。

【途端に慌てふためき出す。

ゆっくりめに、一行ごとに少し間があく感じで。

必死でいい訳を考えるが、まるで浮かばない。

それでもおろおろと、どうにか弁明しようとする】

……っあああっ……！

……えっと。

あ……のね？

これは……その……えっと……

えっと……っ♥

〈主人公〉

「大丈夫、わかってる。

隠さなくておっけ。

それもまたゆづだから」

しかし主人公、どうにかフォローを入れようとするも、いまひとついい言葉が浮かばない。

主人公は、本来もつと器用な人間のはずだ。

その意志さえ持てば、大抵の事はできるのである。

だがなぜか、結月に関する事だけは、どうにもうまくいかない。

この謎の現象のせいで、主人公は……いや、自分たちはどれだけ遠回りしてきた事だろうか。

正直主人公は、ルナのサポートでこの問題が改善されるのではないかと、少し期待していた。

だが、どうやらこれに関しては普段通りらしい。

それとも、彼女の補助があっても、改善され切らないほどの問題という事だろうか。

● 正面 30センチ

「『それ、どういう意味!!』という感じで。」

『それもまたゆづだから』と言われた事に過剰反応する」

あ!!

【ものすごく恥ずかしそうに、もじもじと。許容されるのはされるので恥ずかしいので】
でも……でもお……♥
」

〈主人公〉

「可愛いしね」

そしてようやく出た慰めがこれだ。

これでは、ただの感想である。

だが主人公は、事実こんな結月の事を、可愛いと思っている。

くだらない諍いで疎遠になった期間はある。

だが、その間も主人公はずっと、一貫して結月の事が好きだからだ。

『だったらすぐに仲直りをすればよかったのに』と言われるとぐうの音も出ないのが辛い所ではあるが。

● 正面 30センチ

「【恥ずかしそうに驚き、困惑する。】

照れているというよりも『ありえない！ 私はそんな言葉で納得してないから！』という感じで。

『可愛いしね』と言われた事に過剰反応する」

……ええ……!!

もう、何それっ。

可愛いとか、ないから……♡」

〈主人公〉

「可愛いよ？」

ところで、人が折角勇気を出して意見を述べているのに、こうも否定してくるのはいいかなものか。

主人公にとって、先の言葉はフオローではない。己の素直な気持ちなのである。であるにもかかわらず、結月はまるで受け入れようとしなかった。だんだん主人公もむきになってきた。

● 正面 30センチ

「照れた様子で。とても困ってしまっ

もごもごと小さな声で、主人公の意見を否定しようとする。

『もやだⅡもうやだ』

……あく……。

もやだ……可愛いとか絶対嘘だし……」

〈主人公〉

「嘘じゃないって」

● 正面 30センチ

「【※息遣いのみ※】で表現する。

すっかり恥ずかしくなってしまっ

っ……

「にっちもさっちもいなくなって、いったん話を切り替える。

ものすごく恥ずかしそうに」

あのっ!

とりあえず……。

【観念した感じで。自分が全裸であり、まずはそれを何とかしたい事について述べる。

本当はもっとばやかした表現にしたいところだが、流石にこの言い方をしないと伝わら

ないと判断したので」

服。

き、着るから。

待っ……ててっ……？」

〈主人公〉

「……………」

SE12 主人公がベッドに入る音

【最初から最後まで流す】

【少し大きめの音量で流す】

では、言葉で伝わらないというのなら、どうしていくべきだろうか。

そう考えた時、主人公の身体は、なぜか自然と動いていた。

主人公は至極当然の雰囲気で一步踏み出し、ベッドに入り込むと、そのまま結月に急接近し……手を伸ばしていた。

● 正面 30～0センチ

■主人公がベッドの中に入ってきて、非常に驚くが、それ以上に期待する。

結月の願望は言うまでもなく、主人公と結ばれる事なので。

なので、嫌がっている風を装ってはいるが、肉体的・精神的には全く抵抗していない様子で、おっかなびっくり主人公を受け入れる

「【※一氣に近づく※】

かわいく、ぎよつとして。急に主人公が近づいてきたので」

え？

あ♡
」

SE13 主人公が結月に近づく音

【最初から最後まで流す】

【次の『結月』のセリフと重ねて流す】

SE追加 主人公が結月の身体をまさぐる音

【最初から最後まで流す】

【次の『結月』のセリフと重ねて流す】

【▲追加でフェードアウトする】

● 正面 0センチ 上15センチ

■ 主人公が結月の身体に触れ始める。

結月の顔の下に頭をうずめ、首筋にキスしたり、髪の毛を撫でたり、お腹に触ってきたりしてくる。

驚きつつも嬉しいが、初めての事なので、それ以上に困惑が反射的な抵抗が勝る

「【かわいく驚いて高く喘ぐ。

一行ごとに少し間があく感じで。

主人公がさらに近づいてきただけでなく、身体に触れてきたので」

ひゃ♡

……待って♡

うぁ♡ 待って♡

やゝぁ……♡」

〈主人公〉

「……待たない。待ってらんない」

こうして、主人公の身体は、不思議なほど器用に動き始める。

まるで、主人公だけでなく、この空間を作り出したものまでもが、それを強く望んでい

るかのように。

●正面 0センチ 上15センチ

「かわいく、困ったように高く喘ぐ。

一行ごとに少し間があく感じで。

『やめて』と言ったにもかかわらず、主人公がまるでやめるそぶりを見せないので」

ええ!!

待ってって言ってるのにっ……♡ やあだあ♡

あ♡ 触っちゃやだあ……♡

あ……!!♡

「びくつと低く喘ぐ。

とても気持ちいいところに触れたので。

しかし、強い違和感がある。なぜか、異常なほど気持ちいいので」

“あ♡

「高く、こらえるように喘ぐ」

くうっ……♡

「※4回※ 低く、ゆっくりと、荒く呼吸する。

ものすごく興奮している感じで」

ふーっ……♡ ふーっ……♡ ふーっ……♡ ふーっ……♡

【びくつと低く喘ぐ】

“あ……♡

ダメって♡ 言ってるのにつ……♡

【びくつと、とても気持ちよさそうに低く喘ぐ。

【またも、異常なほど気持ちいいので】

“あゝ……♡

【困ってしまいつつも、意を決して。そのまま流されてはいけけないので】

……っ♡

▲追加 ここでS E追加がフェードアウトする

〈主人公〉

「……♡」

……なるほど。

なるほどなるほど。

なるほど……ど……？

主人公、結月の反応と、何よりも自分自身の行動に驚きつつ、その原因をおおむね察して思わず小さく頷く。

この仮想空間において、自分は、どのような部分が強化されているのか。これについて、一つの仮説を立てる事ができたからだ。

主人公は察しがいい。令和の『できる』女なのである。

それゆえに『結月ときたら、一体どういうイメージを人に抱いているんだ』と文句を言いたくもなるが、今は好都合だ。

おそらく『つよく』なっている点について、存分に利用させてもらおう……。そう思いながら、主人公はこの奇妙な感覚に身をゆだねる。

SE14 結月が離れる音

【最初から最後まで流す】

【次の『結月』のセリフと同時に流して、一気に離れる】

●正面 0センチ 上15センチ→正面 30センチ

「※一気に離れる※」

『嫌というわけではないが、今はもっと話すべき事があるだろう』という感じで」

やめ、てっ♥」

〈主人公〉

「……♥」

●正面 30センチ

「かわいく、困ったように怒る。

主人公が待ち合わせに大遅刻した件について述べる。

『嫌という訳ではないが、この件について納得しない限りはセックスなど到底できない』
という感じで」

……ていうか私♥ 怒ってるんだよ？♥

……私♥ ずっと待ってたのに♥」

〈主人公〉

「……うん」

しかし、ここで結月が再び主人公を拒絶した。

それはもったもな怒りで、主人公は無言で首を縦に振る事しかできない。

● 正面 30センチ

「【怒りが少しヒートアップする。

また、だんだん泣きそうな声になっていく。

『かわいい』の範囲でありつつも『悲しい気持ちや怒っている気持ちは本物』という感じで」

遅れるなら♥ 来られないなら、連絡位、してくればよかったじゃないっ……♥
一言言ってくれれば。

私、大丈夫だったのに。待って、られたのに……♥」

〈主人公〉

「ごめん」

● 正面 30センチ

「【※息遣いのみ※ で表現する。

主人公の言葉にひるんでいるような感じで」

っ……」

★10秒ほどの長めの沈黙

それでも、主人公はこの件について言い訳するつもりはない。

到着までに様々な出来事に見舞われたのは事実だ。

それをつまびらかに説明すれば、主人公は許されるかもしれない。

だが、どう弁明しようと遅刻は遅刻だ。結月を傷つけた事には変わりはない。

そう思うと、主人公はとて経緯を話す気にはならなかった。

●正面 30センチ

■主人公から謝罪を受けた事、主人公に無念をぶつけた事で、気持ちがいぶん落ち着く。

また、主人公の性格からして、遅刻の詳細を語るつもりはないのだろうという事も理解する。

結月としては、到着までに何があったのか知りたい。

この謝り方からして、おそらく、不可抗力のトラブルがあったと思われるからだ。

だが、良くも悪くも『言い訳する』という発想がないのが主人公である。

よほどしつこく追及しない限りは、遅れた理由を聞く事はできないだろうと判断する

「【※息遣いのみ※】で表現する。

『しょうがないわね、うん、わかった』という感じで、小さく息をつく」

……………。

【かわいく主人公の謝罪を受け入れる。

段々怒りがしぼんで、自然と許したい気持ちになっていく感じで】

ううん、もういい……♡

今、来てくれたから……♡

……許す」

〈主人公〉

「……ゆづ……」

その時、主人公の胸に、二つの強い衝動が沸いた。

一つは、目の前の幼馴染が愛おしいという、ごく自然な感情。もうほとんど『いつもの』
と言えるものである。

なので、不自然なのはもう一つだ。

主人公はこれを、今まで同様の気持ちに襲われる事はあっても、決して実行しなかった。
だが、今は当たり前前のように身体は動き『それ』を始めてしまった。

主人公は再び結月の顔に自分の唇を近づけると……彼女にキスをしていたのだ。

● 正面 30〜0センチ

■ 主人公があまりにも自然に近づいてくるので、反応が遅れる

「【自然に近づく。顔を寄せてきた主人公を、きよとんと見上げる】
ん……？」

■ 『どうやらキスされるらしい』と理解する

あ……。

【※しばらく※ キスする。

ごく自然にこれを受け入れ、何度も軽いキスを繰り返す】

ちゅ
♡

あ
♡

……ちゅ♡ ……ちゅ♡ ちゅっ♡

ん♡ ん……っ♡

んんんう……んっ♡

ん♡ ん♡ んっ♡

【※しばらく※ キスする。

ゆっくりと、だんだんキスが深くなっていく。

受け入れつつも、少し苦しそう、甘ったるい反応になっていく】

んんう……♡

ん♡ ん♡ んゝ……っ♡

んー♡ んー♡ んーっ♡

んんんんうっ……♡

んっふ♡

ん♡ ん♡ ……んっ♡

【唇を離す。少し苦しそうに。でも甘ったるく】

……ふはっ♡

■自分でもよくわからないが、キスされた事を受け入れてしまっている自分に気づく。

だが、それはそれとして、急にキスした事はよくわからないので、抗議する

【あまあまに、静かに抗議する。

『全く怒ってはいない。だが、訳が分からなくて困っている』という感じで】

何……？♡

今日何……？♡

さっきから、訳わかんないよお……♡

〈主人公〉

「……あー。ゆづ。私、それでね」

結月の指摘はもつともだ。訳がわからないのはこちらも同じである。だが同時に主人公は、心のどこかで納得していた。

先ほど自分が立てた仮説が正しいのなら、急にキスができるようになるのは当然だ。なぜなら、おそらく……。

●正面 0センチ

「【あまあまに、可愛く続きを促す】
んー……？♥」

〈主人公〉

「今日はさ、遅刻したお詫びをしようと思って、きたんだ。
遅れてほんとにごめん。」

埋め合わせすればいいってもんでもないけど。私にできる事はなんでもするから」

●正面 0センチ

「【主人公の真摯な謝罪に胸がときめく】
あ……。

【優しく。小さく首を振りながら話しているイメージで】

ううん……♡

お詫びなんて、いいよ。

【無理して明るく振る舞っている感じで。

『済んだ事』という言葉で水に流してしまいたいが、うまくできない】
悲しかったけど……もう、済んだ事だし」

〈主人公〉

「ゆづ……」

● 正面 0センチ

■ 主人公がまた顔を近づけてくるので、また、自然に受け入れる。

なぜ『自然に受け入れる』なんて事ができているのか、自分でもよくわかっていない

「【※5回※】キスする。

先ほどと同じ、軽く触れるだけのキス」

ん♡ん♡んっ♡

んんう……♡

ん♡

【※6回※】呼吸する。

甘ったるい、少し荒い呼吸。だんだんゆっくりと落ち着いていく」

……はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、ふー……。

■とても申し訳なさそうにしている主人公を見て、心から『許してあげたい』『主人公を精神的に楽にしてあげたい』という気持ちになる。自分でも意外なほど、優しい声が出る

「とても優しく、愛おしそうに」

そんな顔しないでよ。

もう、怒ってないからね……♡」

〈主人公〉

「……ありがと……」

●正面 0センチ

■落ち込んでいる主人公の事が気になる。

主人公の為にも、話題を変えようとする

「【あまあまに優しく。」

故意に話題を『遅刻した事』から『急にキスした事』に変えようとする」

ていうか……さつきから、ほんと、何……？
♥

【※しばらく※ キスする。

一行ごとに少し間があく感じで。

先ほどよりも深く、濃厚なキス】

んっ♥

んんう……♥ ちゅっ♥

ちゅっ♥ ちゅっ♥ ちゅっ♥

んっふ……ちゅっ♥

ちゅぷぷぷ……ぷちゅっ♥

ん♥ ん♥

んんんう♥ んんうっ……♥
」

〈主人公〉

「……何って、何？」

● 正面 0センチ

■ 主人公の態度に、ちよつと困惑する。

落ち込んでいるかと思っただけなら当然のようにキスを繰り返す主人公は明らかに妙だし、流

されている自分も絶対におかしい。

なぜなら自分たちは恋人ではないどころか、この三か月会話もしなかった関係だからだ。なので結月は、この状況を『元気になってくれるのは嬉しいが、やはりなんだかおかしい。このまま受け入れてはいけない』と思っている

「【あまあまに困った様子で。自信なさげに。

『もしかして、私の方がおかしいの?』と感じるくらい混乱している様子で』
ひ、久しぶりに会ったばっかなのに。

何(なん)でちゅーしたりっ♡

【びくつとする。額にキスされたので】

ん♡

触ったりっ♡

【びくつとする。身体に触れられたので】

……あ♡

すんのお……?♡

私達、そういう関係じゃ、

【※1回※ キスする。

『私達、そういう関係じゃない』と言いかけたところに、唇をふさがれる』
んうううっ……♡」

〈主人公〉

「だってさ。」

……ゆづが『こうして』って言ってる気がするんだもん」

そう。この言葉が一番『しっくりくる』。

主人公は結月に触れたばかりの唇でそう漏らすと、目の前の結月を切なげに見つめる。
その声は、自分自身聞いた事もないほど大人っぽくて……自分だけでなく、結月までも
が驚いているのがわかった。

● 正面 0センチ

■ 主人公が言い出した事に非常に驚く。

その一方で不思議と納得しており『であれば、しっくりくる』と思い始めている。
なので、強く否定できない

「【びくつとしながら驚く。身体に触れられたので】

んんうつ……!! ♡

【非常に困惑する。

冷静に考えれば『主人公が適当を言っているだけ』とすぐにわかるはずなのに、なぜか

スルー出来ない」

……え？ え……？

私が『こうして』って言ってる気がする』って、何？♥

私……何も言っていないもん……

【びくつとする。言いかけたところで、首筋にキスされたので】

あ♥

〈主人公〉

「……ゆづはしたくないの？ キス」

●正面 0センチ

「【あわあわと。そう言われてしまうと『したいに決まっている』と思うので】
あ……」

〈主人公〉

「私はしたいよ。しちゃダメ？」

それとともに、主人公は自分がこれからどうすればいいのか、手に取るようによくわか

った。

自分の願望を素直に口にして、結月に訴えかけていく。

● 正面 0センチ

「あまあまに、だが必死に抗議する。

結月なりに、理屈の通った反論をしようとする」

……っ……♡

そんな事言うの、おかしくない……？♡

第一、し。してから言うの、おかしいし。

してから、『したいからした』なんて言うの、ずるくない？♡」

〈主人公〉

「……そっか。

ゆづはしたくないんだね。じゃあ、もうしない」

● 正面 0〜30センチ

■ すっかり主人公のペースに乗せられてしまう。

自分なりに筋の通った反論をしたのに主人公にはまるで効いておらず、あげく『もうキ

スしない』などと言い出したので『それは困る』とあわあわする。

『キスをしたい』と認めるのは恥ずかしいが『しなくていい』と意地を張るには惜しすぎるので

「【※ずっと離れる※ 主人公から離れて行ったので。

あわあわと困り果てて」

……っええ？

わ、私は。し、したくなんか……」

〈主人公〉

「うん」

●正面 30センチ

「【ももごと恥ずかしそうに】

したくなんかないし……急に無理やりされて、びっくりしてるしいっ………♥

〈主人公〉

「……ほんとに？」

● 正面 30センチ

「あまあまに抗議する。

『困っている様子は伝わるが、『キスなんかしたくない』というのは確実に嘘だな』というのが伝わる感じで」

ほんとに♡ほんとにほんとだしいっ……♡

もう、キスなんか……。

キスなんか……。

■ 不意打ちで主人公の顔が近づき、再びキスされる

● 正面 30〜0センチ

「※ずっと近づく※ 主人公から近づいてきたので。かわいくびくつとする」

あ♡

【※4回※ キスする。

あまあまな、一方的に唇をふさがれるようなキス】

ん♡んっ♡んんうっ……♡

ん♡♡♡」

〈主人公〉

「……本当のところは？ 教えてよ、ゆづ」

● 正面 0センチ

「【すっかり困ってしまつて。

最後の抵抗を見せようとするが『戦況はかなり厳しい』と結月自身理解できてしまつて
いる感じで」

……っう……♡

【少し間をあけてから。

観念した様子で、ものすごく恥ずかしそうに本音を述べる】

し、したい……♡

私ももつとちゅー、したいっ……♡」

〈主人公〉

「じゃ、しょ」

● 正面 0センチ

「※しばらく※ キスする。

一行ごとに少し間があく感じで。

よくわからない位うまいキスに、一方的に気持ちよくされる、という感じのキス」

んんう♡

ちゅ♡

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅぶっ♡

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡

んっく♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡

ちゅるうううっ♡

ん♡ んんう♡

「あまあまに、早口気味に。

キスの異常な気持ちよさについて、矢継ぎ早に尋ねる。

気持ちよすぎて、自分でもよくわかっていない」

ねえ♡

キスってこんなに気持ちいいの？♡

貴方いつもこんなしてるの？♡

私さっき初めてしたのに。

何で口と口合わせるだけで、こんな気持ちいいのお……？♡

何（なん）か、このままじゃ、私、

【※しばらく※ キスする。

『このままじゃ私、おかしくなりそう』という言葉を遮られて、また一方的に気持ちよくされる』

んー♡

ん♡ ん♡ ん♡ んんんう♡

んっ♡ んっ♡ んっ♡

んふうっ……♡」

〈主人公〉

「ゆづ。じゃあ、今度は舌、出してみて」

● 正面 0センチ

「ぼーっと息を吐きながら。

『え?』

ふえ?

【訳も分からないまま、素直に従う。

『こう……?』

ほう……？♡

【※しばらく※ キスする。

お互いに舌を出して、舌を舐め合うキス。

舌の先っぱを擦りつけ合うキスから、どんどん舌全体を絡ませるキスになっていく。
赤文字部分で、まるでキスで絶頂したかのような声が出る】

ん♡ んーっ♡

ん♡ ん♡ んっ♡

れえる……れえる……れえる……ちっ♡

れるれる……ぬちゅっ♡

ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅ♡

んんんう……んっ♡

んー♡ んー♡ んー……♡

れるる、れるる、れるる、れるる、ちゅっ♡

んんんんう♡

んんんんう♡

んんっ……！♡♡

【※7回※ 呼吸する。

唇を離すゝ荒くあまったるい呼吸】

ふはあっ……♡

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあっ……♡

【必死で、困ったように切り出す】

ねえ……あのね？♡

〈主人公〉

「ん？」

●正面 0センチ

「【あわあわと頼み込む】

やっぱり、ちよっと待って？♡

〈主人公〉

「待って、って？」

●正面 0センチ

■この部屋に来てから感じる違和感の根拠について述べようとするが、うまくいかない。

そもそも結月は記憶が混濁している。

なぜ自分がこんなところにいるのか、いつからいつのか、それすらもわかっていないのである。

そのせいで、抽象的な指摘になってしまう

「【困り果てながら必死で】

あの私 ♡ ……私っていうか、全部。

全部。何（なん）か、さっきから変じゃない……?。」

〈主人公〉

「変って?。」

●正面 0センチ

「『絶対おかしいでしょう。どうしてわからないの?!!』という感じで。

引き続き、困り果てながら必死で違和感を訴える」

貴方も、私も、この部屋も、変 ♡

■違和感について、どうしたら理解してもらえるのか、必死で考える。

そうするうち『性的快感が異常なほどに強まっている』事について述べるのがもつともスムーズであると気づくが、これはあまりに恥ずかしく、もごもごと抽象的な表現を用い

てしまう

【少し間をあけてから。

ものすごく言いづらそうに、恥ずかしそうに。

『こんなところⅡ自分がオナニーしていた現場』

……だって。だって、おかしい位、気持ちいいし。

それに、こんなところ見られて……」

〈主人公〉

「こんなところって？」

●正面 0センチ

「【言葉にならない、奇妙な声が出る。

ものすごく恥ずかしそうに、ひるむ。

『みなまで言わせるつもり!!』と思っている】

うあ、ひ。

【具体的な単語を使わずにゴリ押そうとする。

しかし、言いながらますます混乱して、恥ずかしくなってくる。

『変なところⅡ全裸であるところ、オナニーしていたところ』】

…とにかくこういうつ、変なところ、見られて。

普通なら死んじやいそうな程恥ずかしいし♥

絶対逃げたくなるはずなのに♥

■ すっかり困り果て、語彙力が消失してしまう。

『何か』を連呼しながら、とにかく必死に『この状態はおかしい』と訴える

「ほとんど泣きそうになりながら必死に。

少し早口気味に」

私、何（なん）か、何（なん）かできなくてえ♥ できないのお♥

何（なん）か。何（なん）か全部変なはずなのに♥

何（なに）が変かわかんないまま♥

流されちゃってるっていうか…♥」

〈主人公〉

「いいんじゃない。流されても」

● 正面 0センチ

「【反射的に、ツツコミを入れるような感じでかわいく怒る。

『貴方は樂觀的すぎるのよ!』という感じで」

よくないしっ♡

【ほとんど泣きそうになりながら。

この困惑を訴える】

ねえ何（なん）でえ……？♡

どうなってるの？ 訳わかんないよお……♡

【※4回※ キスする。

あまあまな、一方的に唇をふさがれるようなキス】

んっ♡ ん♡ んんう♡

ん♡♡

〈主人公〉

「じゃあさ」

● 正面 0センチ

「【反射的に、泣きそうな声で返事する。

『え？』

ふえ？」

〈主人公〉

「ゆづは、流されたから私とキスしてんの？
キスしちゃってんの、流されたせいなんだ？」

● 正面 0センチ

「【途端に慌てふためいて。

かわいく慌てて、必死に否定する。

この点について誤解されてはいけないので】

……あつ、違♥

そういう意味じゃないっ♥

キスは。流されてしてる訳じゃなくてっ♥

違うんだけどっ♥

でもっ……♥」

〈主人公〉

「んー、じゃあさ」

● 正面 0センチ

「【とても素直に続きを促す。

『もう訳がわからない。貴方が答えを教えて』という感じで」

うん……♡」

〈主人公〉

「訳わかんないのに、何か流されちゃってるように感じるのはさ？

『本当はしたいって思ってた事』だから、抵抗する気にならないだけ。
って事なんじゃない？」

● 正面 0センチ

■ なぜかわからないが、妙に納得して。しかしやはり、素直に認めるのは沽券にかかわる。

「【きよとんととして」

あ……？♡」

〈主人公〉

「これが、ゆづのしてみたい事なんだよ」

● 正面 0センチ

「ぽかんとして、主人公の言葉を復唱する。

『とても信じられないが、どうやらそうらしい』という感じで」
これが……私が、前からしてみたいって考えてた事……？」

〈主人公〉

「そう」

●正面 0ゝ30センチ

「【※スツと離れる※ 自分から距離をとる。

ハツと我に返って、あまあまに否定する。

もしこれを認めてしまったら大変な事になるので」

そんな……あ、ありえないし♥

もしこれが貴方の言う通り♥

『ほんとは私がしたいと思ってた事』ならそれ、もっとまずいじゃない♥」

〈主人公〉

「どうして？」

●正面 30センチ

「しどろもどろになりながら、あまあまに、必死に否定する。

『こんな風Ⅱ全裸である事、オナニーしていた事』

……だってこんなの♥ 絶対ダメだし♥

こんな風になってるとこ、貴方に見せるなんて、絶対ダメだし……♥」

〈主人公〉

「こんな風って？」

●正面 30〜0センチ

「【※スツと近づく※ 主人公の方から近づいてきたので。

ものすごく恥ずかしそうに、困ってしまった」

『こんな風に』って言うのは……その……♥」

〈主人公〉

「こそこそ隠れて、一人えっちしてたって事？」

●正面 0センチ

「反射的に、びくつと驚く。

何があっても言われたくない単語を、そのままずばりと言われたので……あ！

【※セリフ終わりまで、声がとても小さくなる※

ものすごく恥ずかしそうに、ぼそぼそと。すっかり困り果ててい。言わないで……♡

もうわかってるんでしょ？♡

だったら、わざわざ言わなくていいじゃないっ……♡」

〈主人公〉

「なんで？ 大事な事じゃん」

●正面 0センチ

「【反射的に、必死に。元の音量に戻って】言わなくていいの……！！

【『キス』と言いかけて、なぜか慌てて『ちゅー』に言い直す。こんな言い換えに、全く意味はない事はわかってる。

だが、まだ『ちゅー』の方が言うのに抵抗がない単語なので」

キ。ちゅーは、自分で決めて、した事だけど。

■オナニーしていた件について、必死に言い訳をする。

もはやしていた事自体は言い訳のしようもない。

だが『主人公を想ってしていた』という事だけは、何が何でもバレたくない。しかし必死になるあまり、どんどん理屈が乱暴になっていく

【おろおろと、必死に弁明する。

しかしまるでうまくいかず、またも雑な言葉でごり押そうとする】

貴方が部屋に入ってくる前の事は、その。

貴方が来ると思っていた事じゃないっていうか。

とにかく貴方には関係ない事だから、貴方に見られたいと思って、した事ではないって
いうか……♡」

〈主人公〉

「いや、あるよ」

●正面 0〜30センチ

「【※勢いをつけて思いつきり離れる※ 今すぐにでも逃げ出したいので。
完全に困惑して。

『何それ!!』という感じで」

ええ？」

〈主人公〉

「……だってゆづ、私の名前、呼びながらしてたんだから。だから呼ばれたと思って、きたんだけど？」

ここでしれっと嘘をつく事ができたのも、もしかすると、この空間の影響かもしれない。

主人公は驚くほどさりと嘘をつく、あたかも『しらばくれるつもり?』とでも言いたげな、恨めしげな目で結月を見る事にさえ成功する。

むろん、主人公の耳には、そのような声は一切聞こえてない。

だが、否定されたらされたで色々やりようはある。

今はとにかく結月の願望と、病とは一体何なのかを、本人の口から聞き出す必要があった。

そのためなら主人公は何でもやってやる構えだったが……まさか、嘘までうまくなるのは想定外だった。

まったく香椎結月という人間は、双葉みめいという人間を、どう解釈しているのだろう。

● 正面 30センチ

「【完全に虚をつかれて。

高く、悲鳴のような声で。

まさか、そこまで聞かれていたとは思わなかったので。

完全に頭がフリーズした状態でおろおろする」

あっ……!!

えっ。……えっ？

聞こえてたのっ……!! ♡

あっ。貴方の、名前。

呼んでたの、聞こえてたのっ……？ ♡

〈主人公〉

「……………」

こうして少々腹を立てた主人公は、あえてここでは『そうだよ』と言わず、沈黙を守ってみる。

頭の回転速度が『およそ0』になっている今の結月に、主人公を上回るような知恵が働

くとは思わない。

だが、万が一引っかけ問題を仕掛けてきていた場合、うかつに乗るとこちらが不利になる。

今はそのまま、結月の反応を待つのが正しいと考えたからだ。

● 正面 30センチ

「『呆然と、うわごとのように。』

『もう終わった。すべてが終わりだ』という感じの絶望具合で」

あ、あ、あ……」

〈主人公〉

「ごめん。今のは嘘」

● 正面 30センチ

「【悲鳴のような声でつつこみを入れる。】

主人公が、あまりにも堂々と嘘をつき、またそれを認めたので」

嘘なの……っ!?!」

〈主人公〉

「うん。ほんととは聞こえなかった。

ただもしかしたらそうかなと思って、そうだったら嬉しいなあって、想像でしゃべってみた」

そしてこの悪びれなさ。自分でも驚きである。

主人公はあっさりネタばらしすると、すっかり慌てふためいている結月をにやにやと見つめる。

どうやら結月は主人公の事を『いつもからかってくる、意地悪なやつ』とでも思っているらしい。

おかげで主人公は、いつも以上にすらすらと彼女を操る事に成功してしまった。

● 正面 30センチ

「【悲鳴のような声で非難する。

それでもどこかわいく、コミカルな感じで】

酷い。適当言って、騙したのねっ……？♥」

〈主人公〉

「うん。でも、正解だったでしょ？」

● 正面 30センチ

■ 主人公に優しく見つめられ、しどろもどろになる。

今日の前にいる三か月ぶりの主人公が、以前よりも随分余裕があるように感じられてきて、ドキドキしてくる。

これはルナが言う所の『結月の主観による強調効果』なのだが、結月本人はそんな事を気づくはずもない

「【かわいく、困ったように言葉を詰まらせる】
っう………♥」

〈主人公〉

「私の名前、呼びながらしてたんだよね？」

● 正面 30センチ

「【小さな声で、恥ずかしそうに】
うう………」

〈主人公〉

「いいじゃん。可愛いよ。」

さっきは適当言ったけど、凶星だってわかって、凄いい嬉しい」

それでも、完全に参加してしまっている結月を可愛いと思う気持ちは本物のはずだ。

主人公はごく自然に本音を伝えたと、結月の反応を待つ。

奇妙な余裕まで、生まれている気がする……。

● 正面 30センチ

「【あまあまに否定する。

少し早口気味に】

うう嘘。嘘。嘘っ♡

こんなの嬉しいなんて、絶対嘘っ……♡」

〈主人公〉

「なんで嘘だと思ふのさ」

● 正面 30センチ

■ 主人公の希望通り『嘘』だと思ふ根拠について述べる。もはや明言は避けられない。

だが、言わなくては話が進まない。観念して、己の罪を認め始める

「『ものすごく恥ずかしそうに、言いづらそうに』
だって私。

か。勝手に貴方の事っ♡ 呼んで♡

貴方の事思い出しながら……そのっ♡」

〈主人公〉

「うん？」

●正面 30センチ

「『ものすごく恥ずかしそうに、観念した感じで。』

『して……た』 Ⅱ 『オナニーをしていた』」

して……たのよ。

「ちょっと泣きそうになりながら、自分の意見を述べる。

『自分だったら絶対に気持ち悪いと感じる。……相手が主人公以外の場合は』
『と思っているので』

こんな気持ち悪いでしょ。普通に考えて、嫌に決まってる事じゃないっ♡」

〈主人公〉

「……いや？」

● 正面 30センチ

「【悲鳴のような声でつつこみを入れる。

主人公が、あまりにもしれっと結月の意見を否定したので。

『『いや』!?!』』 『『いや、違うよ。そんな事はないよ』ってどういう事!?!』』
『いや』!?!』

〈主人公〉

「他の人にされたんなら確かに気持ち悪いけど。
ゆづならいいよ」

だから、こんな事もすなりと言えた。

普段の主人公なら、同じように考えつつも、こうも素直には言葉にできなかったかもしれない。

そう思うと、この空間の存在は非常にありがたい。

いらぬ誤解や不要なやり取りを減らし、本当にとるべきコミュニケーションがとれてい

る気がする。

●正面 30センチ ひそひそ声

「【※】ここだけ、なぜか、ひそひそと内緒話するような声になる※
『とても信じられない』という感じで』
嬉しいの……？♥」

〈主人公〉

「うん。嬉しい。ここまできた甲斐あったなって思ってる」

●正面 30センチ

「【呆然として。

『とても信じられない』という感じで』
そんな……」

〈主人公〉

「だから、もっとちゅーしよ？」

●正面 30〜0センチ

「※そっと近づく※ 主人公が自然に接近してきたので」
あ……。

【※しばらく※ キスする。

一行ごとに少し間があく感じで。

これまでとは打って変わった、ゆっくりとした、ねっとりとしたキス」

ん♡ ん♡

んー♡

ちゅ♡♡ ちゅ♡♡ ちゅ♡♡

ん♡……♡ ちゅ♡♡ んんんう……♡ ちゅ♡♡

ちゅ♡♡ ちゅ♡♡ ……♡ ちゅ♡♡ ちゅぶ♡♡

はああ……♡ ちゅ♡♡

んんんう……♡♡

【※4回※ 呼吸する。興奮気味の荒い呼吸】

ふー♡♡ ふー♡♡ ふー♡♡ ふー♡……♡

■主人公の言葉を受けて、ようやく先程の『これが結月のしたい事なのではないか』という指摘を受け入れられるようになってくる

じゃあ、私……♡」

〈主人公〉

「うん」

● 正面 0センチ

「【恥ずかしそうに。

一行ごとに少し間があく感じで。

声を震わせ、緊張しながらも、どこか『言いたそう』に。

『とても信じられないが、それが事実だと認めざるを得ない』という感じで」
貴方の言う通り。

ほんとは。

見られたいって思ってたのかなあ……？ ♡

ほんとは貴方にバレちゃいたって。私の気持ち、知って欲しいって。

思ってたって事なのかなあ……♡」

〈主人公〉

「そうなんじゃない？ 少なくとも私はそう、思ってるけど」

● 正面 0センチ

「【恥ずかしそうに言葉を詰まらせる】

っ……っ♡」

〈主人公〉

「ゆづ。ほんとはどうしたかった？

笑わないよ。

真剣に聞くから、ゆってみ？」

● 正面 0センチ

■ 優しく言葉を促す主人公に、ものすごくときめく。

結月は主人公の事を『いつもなんだかんだとても優しい人』『意地悪っぽい態度をとる事もあるが、理不尽な事はしない、とても信頼できる人』だとは思っている。

だが、今日はいつもに増して魅力的に見える。

そんな主人公に後押しされて、普段は素直になれず、できない事でも、今日はできるよ
うな気がしてくる

「【どこか甘ったるく、かわいく言葉を詰まらせる】

……っう……っ♡」

〈主人公〉

「うん」

● 正面 0センチ

「【恥ずかしそうに、でも意を決して切り出す】

あの、ね……？ ♡」

〈主人公〉

「うん」

● 正面 0センチ

「【※息遣いのみ※ で表現する。

大きく息を吸い、覚悟を決める感じで】

……………。

【今にも泣きそうな声で、でも、きっぱりと告白する。
だんだん、少しでも早口になる。

『してた』 Ⅱ 『オナニーをしていた』」

そおだよ？♥ 私、してた♥

貴方の事考えながら♥ ここで♥ 一人でしてましたあ♥

勝手に変な事してごめんなさいっ♥

ほんとにほんとにつ♥ ごめんなさいっ♥

〈主人公〉

「……♥」

その時主人公の胸に沸いたのは、ぞくぞくするような、どろりと熱い高揚感だった。

今日の結月は妙に嗜虐心をそそるといふか、いつもに増して隙だらけといふか、いじめられる事を望んでいるかのような雰囲気がある。

それを主人公は可愛いと思うし、望むとおりにしてあげたいと強く思うようになっていく……。

● 正面 0センチ

「【今にも泣きそうな声で、でも、どこか嬉しそうに。】

『許してくれて』 Ⅱ 『こんな自分の行動を許してくれて』
それから。』

許してくれてっ、ありがとう……♡」

〈主人公〉

「うん。偉いぞ。よく言えたね」

SE15 主人公が結月の頭を撫でる音

【最初から最後まで流す】

SE16 主人公が結月の背中をぼんぼんする音

【最初から最後まで流す】

【2回繰り返して流す】

●正面 0センチ

■すべてを打ち明ける覚悟を決める。

ものすごく抵抗はある。だが、打ち明けなくてはならないと感じたので
「不安そうな声で。でも、どこか決意に満ちた様子で」

あ……のね？」

〈主人公〉

「うん？」

● 正面 0センチ

「泣きそうな声で、かわいく。

しかし、覚悟を決めても『おっぱい』とは一回ですんなり言えない。
恥ずかしさのあまり、どもってしまう」

私ねえ？♥ 何（なん）でか、全然わかんないんだけど。

今月入ってから、急に。

おっ、お」

〈主人公〉

「……お？」

● 正面 0センチ

「※息遣いのみ※ で表現する。

大きく息を吸い、覚悟を決める感じで」

っ……。

【ウイスパ―気味にぼそつと、だが、はつきりと。

※聞き手が特に『えっ!! 聞こえたけど、何て言った!!』と聞き返したくなるような感じで】

……おっばい。

【少し間をあけてから。

途端に泣きそうになって。

打ち明けた途端、誰にも言えない不安から解放されたので、主人公に甘えたいくなる】
出るようになっちゃってえ……♥ 止まんないのっ♥」

〈主人公〉

「……!」

●正面 0センチ

【泣きそうな声で、困り果てた様子で自分の現状を述べる】

それから、ずっと♥

やらしい事ばっか考えちゃって……。

頭、ずっとそれで一杯で……苦しくて♥

【泣きそうな声で、あまあまに懇願する。

打ち明けた途端、主人公に頼りたい気持ちがあふれてきている感じで」

だからあ♡

助けて欲しいっ♡

助けて下さいっ♡

貴方につ♡

助けて欲しいですうっ……♡」

ここでフェードアウトして終了。